神戸うまいもの地図

神戸ほど〝食べもの〟に恵ぐまれている都市もめずらしい。海外にまで〝うまい！〟と定評のある神戸ステーキと灘の生一本、そして瀬戸内海の鮮魚――この味のトリオのすばらしさは神戸ならではです。種類も豊富、ことにミナト街として発達しただけに「西洋料理」の店が多いのも特色の一つです。フランス、ロシヤ、スペイン、イタリア、ドイツ、インド、などバラエティに富んだ料理が手頃なお値段で味わえます。そして神戸には純ヨーロッパ風の日本一うまいパンがあるのでも有名です。

また寿司にしても海幸の宝庫、瀬戸内海の鮮魚に恵まれ、飯は〝すし米〟として一級の品摂津・播磨の谷米とあっては不味いはずがありません。

特に中華料理は中国人が営む本場の料理店が一〇〇軒以上もあります。

そのうえ、神戸の水―六甲山から流れる水のうまさは格別で、神戸に入いる内外の外国航路船はこの〝神戸の水〟を必ず積んでいきます。その水を使った飲み物、灘の生一本やコーヒがこれまたおいしいのは当然でしょう。しかもこれらの〝うまいもの店〟は、交通の便利な三宮を中心に、センター街、元町などのメイン・ストリートに、そして静かな山の手やエキゾチックな雰囲気のただよう海岸通りに多く、いずれもシャレた感じの、ミナト神戸にふさわしいお店ばかりです。

うまいもの店
ごあんない

レストラン 喫茶
ベル
センター街山側
TEL③0022

英国式バー・レストラン
キングスアームス
市庁舎向い浜側
TEL㉒3774

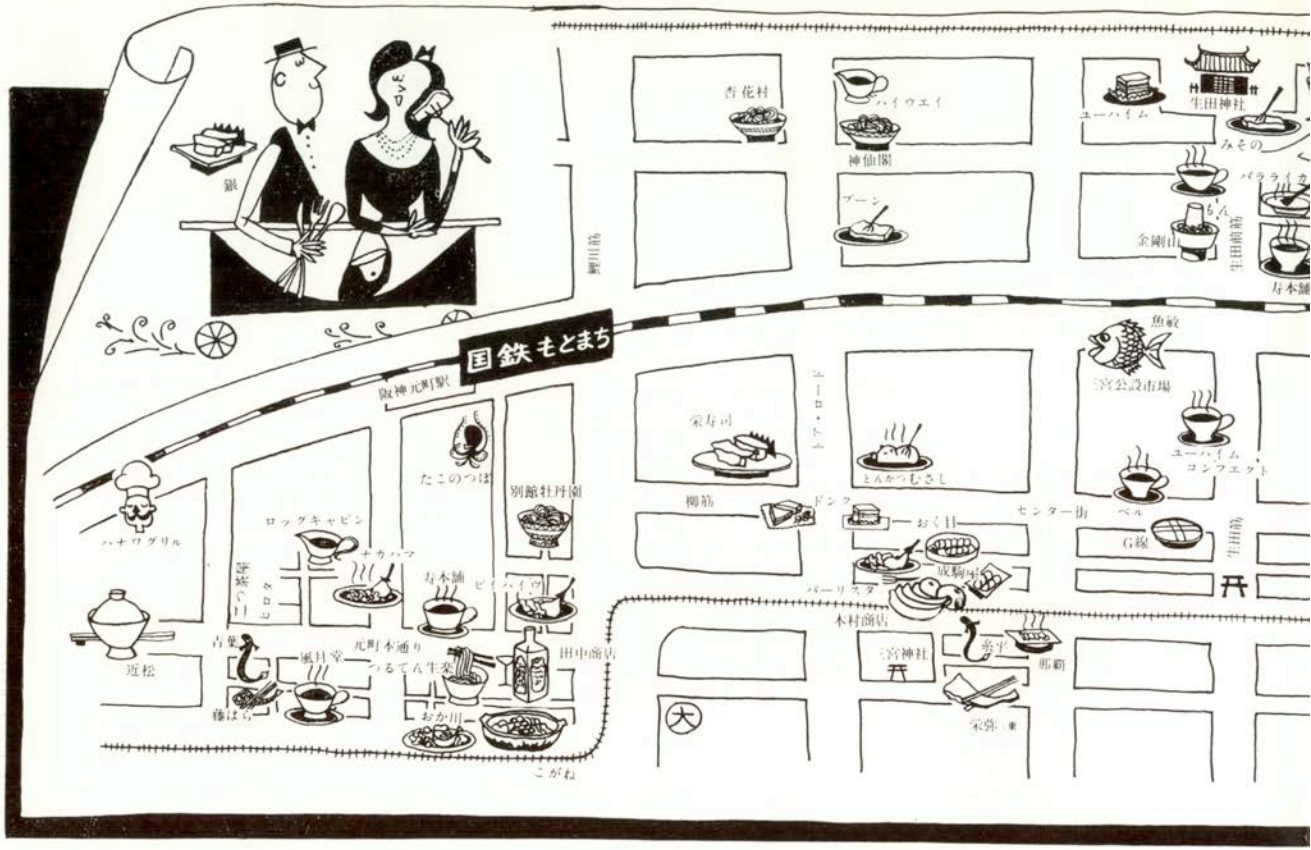
グリル
コウベステーキ
阪急三宮山側
TEL㊴2581～2

ロシヤ料理
バラライカ
生田筋東入る
TEL③7919

江戸前
栄寿司
三宮柳筋
TEL③0069

テキのナカジマ
三宮生田新道
TEL③1606

レストラン 旧丹平グリル
ビイハイヴ
元町1丁目
TEL㊴0024



寿司
三福
三宮阪急東山側
TEL③2456

ステーキ
みその
神戸生田神社前
東京田村町3

宮水のコーヒー
にしむら
中山手一丁目電停前
TEL㉒1872

レストラン
ハイウエイ
トアロード東銀隣
TEL③7622

グリル
十字屋
神戸市庁舎横
TEL④5455

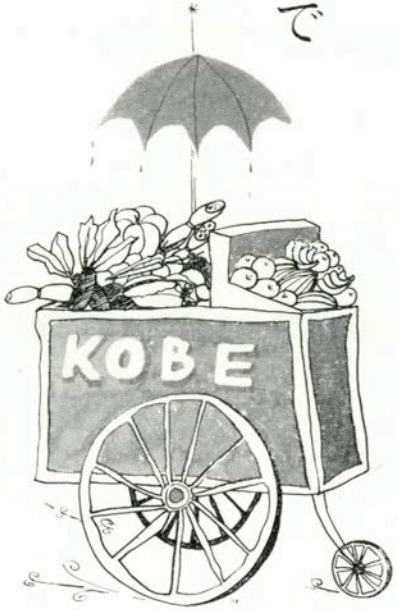
もん

トンカツ
ムサシ
神戸三宮センター街
TEL③3771

鰻・蒲焼・日本料理
竹葉亭
三宮阪急西隣
TEL③1120 1140

初夏！

ハイ・センスの神戸で
さわやかなお買物
楽しいくらしは
神戸の
トップ・ショップから



さわやかな
みどりの
季節に
なりました

元町2丁目
③ 2996

いつでも贈って喜ばれる
風味豊かなカステーラ！
＜元町6丁目＞

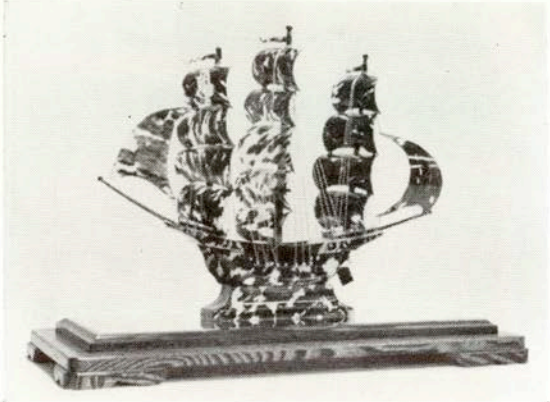
長崎堂本店
本店7—4402元町4—4130
直売店　神戸大丸・阪急

YE AULD SHIRT SHOPPE

よろず御襯衣仕立處

神戸シヤツ

神戸大丸前　TEL③2168



センスあふれる
べっ甲の専門店
元町一丁目

太田龜甲店

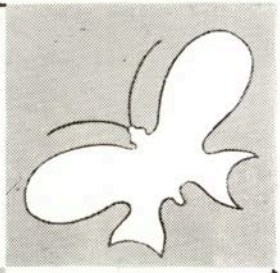
③6195

ハイセンスの紳士服で
最高のおシャレを
元町四丁目

三恵洋服店

TEL④7290

特　選
ハンドバック
専門の店



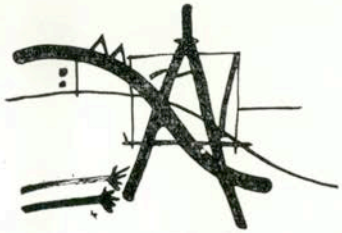
シラサ

元町2/0813

高級紳士服専問店　（神戸クーポン歓迎）
オーダーメード・イージーオーダー・レデイメード
神戸テーラー
生田区北長狭通2（省線高架通50）③2817

観音像塑土
山西省大同　〈宗時代〉
新古美術品　播新
③神戸市元町三丁目
2516

額縁絵画・洋画材料
室内工芸品



末積製額
三宮・大丸北
トア・ロード
③1309・6234

初夏のスポーツウェアーなら…

東京洋品の店
千秋屋
元町4丁目④6959

神戸店・トアロード ③二二九三
大阪店・心斎橋ロビー(211)一〇四四
コスチューム
アクセサリーの店
芸夢

KOBE
SUGIYA
ハンカチと下着の店
トア・ロード TEL③3436
今年のブラウスは
デキシーランド
チェック!!

RED DIA BRAND
男子
洋品の店
神戸屋
元町2③2689

毛皮の店
ウエダ
元町2丁目③0686

ショート・ショート ②

落着き払った悪党

陳　舜　臣

え・松　本　宏

悪党スカンクの次郎の身上は、決してあわてないことであった。どんな仕事でも彼は悠々とやってのけた。犯罪のたのしみをゆっくりかみしめ、心ゆくまで吟味するのである。

悪党仲間のあいだには「次郎は仕事がおそすぎる」という非難もあった。しかし成功率はなによりも雄弁だ。すばやくやった連中に限って、よくとっつかまる。次郎は久しくサツからにらまれていたが、いちどもドジをふんだことはなかった。

「ただのカチ上げとちがうぞ！」

ある晩、代書屋の太田の家におしこんだとき、次郎はそう言って、そばの椅子に腰をおろした。三分間黙ってから、彼はつぎの言葉を口にした。――「どや、言うことときくか？」

かまきりの貞吉が取次いだこの仕事は、依頼人が五万円も前金を払っている。成功の暁には、もっとたんまり貰えることになっていた。それに相手が首をタテに振らなければ、バラしてしまってもいいというご注文だ。

「言うことときかんと、可哀そうやけど、殺（や）ってしまうで」と次郎は正直に言った。

「いやや！」太田は首をヨコに振った。

「考え直すこっちやな」次郎は家のまえの本屋で買った『週刊裏話』を丸めてポンと自分の膝をたたき、「おれがはいったんは、誰にも見られとらんわい。ここには

だあれもおらへん。な、おれ、ちゃんと手袋はめとるやろ?これなんでや知っとるか?」
「いやや!」と太田は繰返した。
「手袋は指紋をベタベタつけんためや」
「そんなコケおどしに……」
「コケおどし?そう思うのはあんたの勝手や。おれはピストルも出刃庖丁も持ってきとらへんけど、まあ、今にわかるやろ」
「出て行け!」と太田はどなった。「わしは忙しいんや仕事の最中や」
「おれも大事な仕事の最中やで」
「もっと大きな声出すぞ!」
「なんぼ喚いたかて、声は届かんやろ。隣とはあない離れとる。そっち側は人の通らんだだっ広い道やで。それに、声を出したら、仕事が早よすむだけの話や」
「わしはおまえなんかに構っとられんわい。明日の朝渡さんならん書類があるさかい」
太田はそう言って机にむかった。コピー用の鉄筆をとりあげたが、手が顫えて書けない。
「おっさん、顫えとるやないか。やめとき。それよかとっくり考えてみたほうがええやろ。首をタテにふるかヨコにふるか、おれはどっちでもかめへんで」と次郎は言った。
代書屋は意地になって鉄筆を握りしめ、深呼吸をして手の顫えをとめようとした。
「みてみイ、よう書かんやろ。ま、そないして考えとけ。おれも忙しいから」次郎は腕時計を見て、「五分間にしてくれやな。ちょうど十一時まで待つといたる」
次郎はほんとうに五分の猶予を与えたのである。代書屋は相かわらず手がふるえるので「仕事」ができない。次郎は椅子にひっくりかえって、「週刊裏話」をひろげた。読むふりをしたのでなく、実際に読んでいたのだ。その証拠に、頁の切れていないところで、
「このペイパー・ナイフを借りるで」
と、机の隅にあった太田のペイパー・ナイフをとりあげて頁を切った。
……五分たって、時計が十一時をうった。
「時間切れや」と次郎は宣告した。「もの言わんでもええ。首を振ってみイ、タテかヨコか」
太田はやっぱり首をヨコに振った。
太田は立ちあがって、
「おれが見たんはヨコやった。間違えたらあかんからもう一ぺんたしかめたいな」
太田の首は再びヨコに振られた。
次郎はペイパー・ナイフを握りしめた。
「さっきも言うたけど、おれはハジキもドスも持っとらへん。得物もおっさんもちや」
代書屋の太田は殺害された。悪名高きスカンクの次郎が、最近太田にたいして脅迫がましい言辞を弄したことがわかった。小手調べと偵察を兼ねたにちがいない。むろん警察では次郎を取調べた。
しかし次郎には怪しげなものだがアリバイがあった。問題の夜、彼は十時から十二時まで相棒のカマキリの貞吉の家で酒をのんでいたという。貞吉はそう証言した。カマキリの証言だから、アリバイとしては立派なものではない。それにしても次郎の犯行を立証するものが何一つない。次郎のことだから、たとえ返り血を浴びていても、そんなものはとっくに処分してしまっただろう。
「あの日は太田の家なんか行っとりまへん」
落着き払って次郎はそう繰返した。
釈放されてあたりまえといった顔で、次郎が鼻歌をうたいながら出て行くのを見て、担当の部長刑事は腹の底から唸った。
「畜生!証拠がほしい、証拠が!」
「もう一べん、やつの部屋を捜査してみますか?」見かねた部下の一人が建言した。
「血のついた服なんかは出るまい。隅から隅まで調べ

たんだから」

そう言って部長刑事は唇をかんだ。

それでも結局、彼は部下を連れてもう一度下山手通りの次郎の家へ行くことにした。なにも期待はしていなかったが、あまりの口惜しさに、じっとしておれなかったのだ。

「またおいでなすったね」次郎は冷ややかに刑事たちを迎えた。「あっしや、やましいこと、これっぽちもおまへん」

「政防法について二時間にわたって貞吉と論議していたそうだな」部長刑事はたずねた。

「さよです。あっしや政防法に賛成なんや。世の中、もうちょっとひきしめんとあきまへんで。たるんでますわ、ご当世は。貞吉なんか、基本的人権が法律の拡大解釈によって侵害されるおそれがある、てなことぬかしとりましたけど」

「大そう高尚な議論をしだものだね」

「あっしらが政治を論じたらあかんのでっか?」と次郎はくってかかった。

「わかったよ、おまえが政治に関心をもってるってことは。毎にち丁寧に新聞を読んでるだろうな」

部長刑事は部屋を見まわして皮肉な笑いをうかべた。この部屋を捜査したが、新聞紙なんか一枚も出てこなかったのだ。

カンのいい次郎はすぐに気がついた。

「新聞は駅で買うて電車のなかで読みすてますねん。内容はちゃんとこのおつむのなかにおさまっとりますさかい」

次郎は誇らしげに己れの顔をたたいた。

「週刊誌は電車のなかにすてないのかね?」

部長刑事は畳のうえの『週刊裏話』を指さした。

「ああ、そいつはつまり、あの日の夕方出たばっかりの本で、あれからご存知のとおり忙しかったもんやからまだ半分も読んどりまへん。読んだら捨てちまいまっせ余計なもんはすててしまうタチでして」

「血のついた上衣なんかまっさきにすててしまっただろうな」

「やなこと言わんといて下さい、旦那」と、次郎はにこやかに言った。「なんべんも言いますけど、太田のとこへは行ってまへんで」

部長刑事は「週刊裏話」を手にとって頁をめくった。完全なエロ雑誌で政防法のことなど一行も出ていない。

ある頁のところで、部長刑事はめくる手をとめた。しばらく考えてから彼は、

「よし!」と朗らかな声で叫んだ。「次郎、おまえはあの日の夕方、太田の家へ行ったんだ。忘れてるかもしれんが、よく思い出してごらん」

「行ってやしませんで」と次郎は抗弁した。

「ほんまにおこりまっせ。冗談にしろ、そんなええ加減なこと……」

「おまえは忘れたんだ。太田をグサリとやったあと、貞吉のところで大酒をのんだからな。アルコールがはいると、一時的にものを忘れるものだ。だけど、落着いてよく考えてみなさい。そしたら思い出すだろう」

「証拠は?」いつも落着いている次郎が、このときばかりは我慢がならぬとばかり、大声を出した。「卑怯でっせ、旦那。証拠もなんにもなしに心理戦術で……」

「なあ次郎」部長刑事はやさしく言った。

「おまえは手紙を書くことがあるかい?ここには便箋もペンもなかったが」

「手紙は親方のところで書くんや」

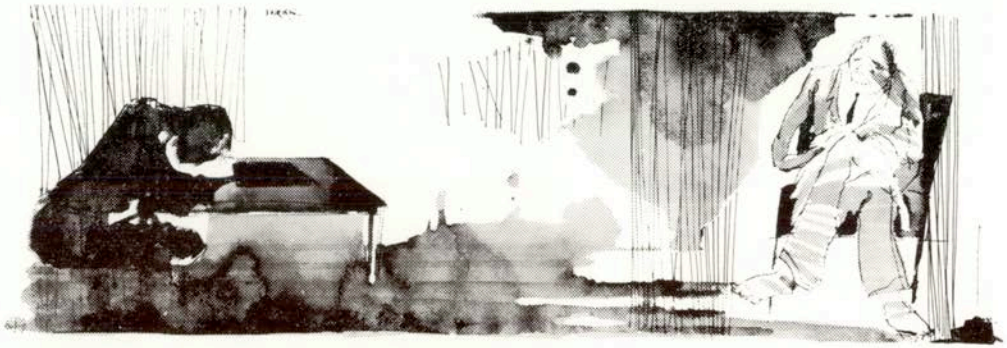
「あの日は親方のところへ行かなかったね」

「ええ、あの日の足どりはちゃんと言うたりまっせ。競輪へ行っておそうなった。一旦家に帰ってから貞吉のところへ……そこへ着いたんが十時まえ」

「週刊裏話はいつ買った?」

「これでっか?貞吉の家へ行く途中や」

「貞吉のところで読んだかね?」



「いいや、いきなり政防法やったもん」
「じゃ、この雑誌はいつ読んだ?」
「帰ってからひろい読みしたかな……」
「そとにもち出さなかったね?」
スカンクの次郎はだんだん不安になってきたらしい。けげんな顔つきで首をふった。
「いいや、どこへも……」
「それじゃ、おまえが太田の家へ行ったことがわかった。おまえはウソをついたか、それともド忘れしちまったかだ」
部長刑事は「週刊裏話」をひろげて、次郎のまえにつき出した。
「ここに頁を切ったあとがある。太田のペイパー・ナイフでこの頁を切ったんだ」
「なんやて!」次郎は兇暴な声を発した。
「それはあっしのナイフで切ったんやで!」
「おまえのナイフじゃ、こんな工合に切れないね」
「ナイフ……おれは、その、ナイフの背のほうで切ったから、そんなふうに……」
「じたばたするな」部長刑事は次郎の肩をおさえて、「思い出すんだ。これが太田のペイパー・ナイフだってことはわかっている」
部下の一人が窓のところへまわって、次郎の脱走に備えた。
部長刑事はつづけた。——
「太田は仕事をしていた。代書屋だからカーボン紙を使ってコピーをとっていたんだ。あの男がカーボン紙を半分に切って使っていたことはわかっている。それを切るのに、太田はペイパー・ナイフを使ったんだよ。いいか、だからペイパー・ナイフには黒いカーボンがついていたはずだ。この頁のはしに黒くついてるのはなんだ? 鑑識へ出せばすぐにわかるがな。……殺(や)るまえに雑誌の頁を切るなんて、いかにもおまえらしいと思うよまったく。だけど、年貢のおさめどきだな」

(この項おわり)

一店紹介

婦人帽子の店

マキシン

トア・ロード

ご婦人向きのシャレた店の多い「トア・ロード」にあって、ひときわ香り高いパリ・モードの雰囲気がいっぱいのお店――それが婦人帽子店で世界的にも知られる「マキシン」です。

店内にはいつも季節に先きがけた赤、グリーン、ピンク、白…といろとりどりの美しくデザインされた帽子が幾種類も飾られており中に入ってあれこれと気に入ったデザインの帽子を手にするだけではや乙女ごころはパリに飛ぶような魅力のあるステキなお店です。

戦前は生田神社前にあって、戦後場所を移して今のトア・ロードに店を構えたもの。

社長の渡辺利武氏は、婦人帽を手がけられてもう十四年を数えられるというベテラン、仕事熱心なことは有名で、もの腰はやわらかくいつもニコニコと応待してくださる。また、お店のお嬢さんたちも勉強家ぞろいで大切なオシャレのポイントともいうべき〝帽子〟の選択に適切なアドバイスを親切にしてくれるので気持ちがよい。

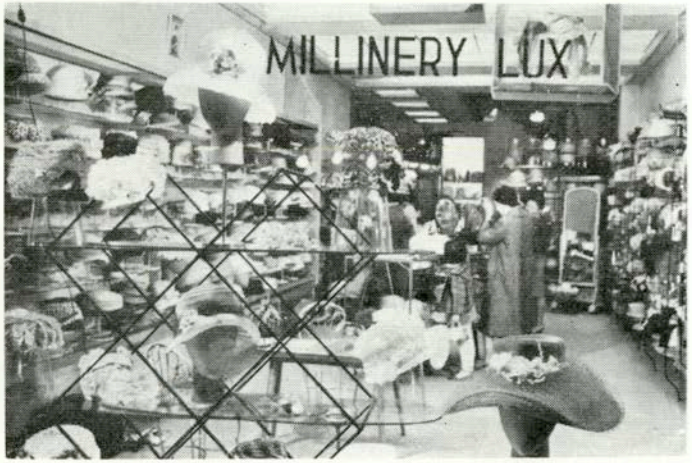
場所がら外人のお客さんが多く、また京阪神間はもとより遠く東京名古屋、からもわざわざデザインを注文にくるといったお得意さまの多いのもこのお店の特色です。

北海道を除く全国各地のデパートに支店や出張所があるほか、沖縄にも進出するなど「マキシン」の名は内外ともに高まる一方です

「とにかく一途にいい作品を作って市場へおくり出したい」といつもこのことを念頭に仕事をやっていますとおっしゃる渡辺社長は小さい時から何かシャレた美しい店をもつのが夢だったとか――。

三年ほど前には輸入先きのヨーロッパ各地へファッションの研究にも行かれている。「戦前にくらべ帽子はずいぶん大衆化されてきました。またみなさん個性に合ったオシャレがお上手になりましたねそれだけに私どももデザインに一段と熱が入いります。もっと気楽にかぶっていただけるように努力したいですね」と仕事の話となると一段と熱が入ります。

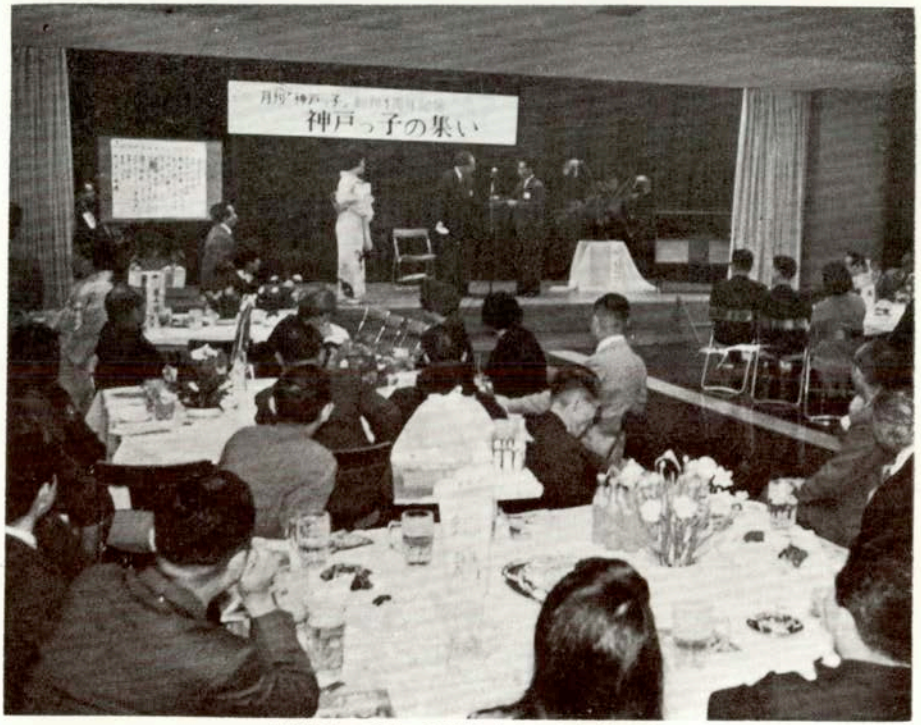
（五十嵐）



（彩どりゆたかな帽子が美しく飾られた店内）

盛大だった創刊一周年記念

神戸っ子の集い



（百崎氏の手品に興じる和やかな会場風景）

・創刊一周年を記念して開かれた〝神戸っ子の集い〟は、三月二十三日午後六時から生田区京町筋の松下電器神戸営業所五階大ホールで花やかに行なわれました。

「神戸っ子」が、日ごろ何かとお世話になっている方たちに、幸せにも無事、一年目を迎えることができたことの感謝と、合わせて二年目の門出を元気づけていただこう――という目的で開いた集いです。当日はあいにくと夕刻から雨模様でしたが、阪本知事をはじめ木下繁神戸市経済局長、古林喜楽神大教授、作家の白川渥、司馬遼太郎、陳舜臣各氏、画家の中西勝氏、福富芳美神戸ドレスメーカー女学院長、百崎辰雄ビオフェルミン社長、直木太一郎神港倉庫社長、田中健一郎甲南汽船社長、山口泰弘川崎電機製造副社長、徳岡英産婦人科病院長、そして「神戸っ子」がお世話になっている各商店の方たち合わせて約百人以上もの人が出席してくださり、さしものの大ホールも大にぎわいでした。

ポーピー、シルバー・ムーン、阿以子、ルフラン、ムーン・ライトの各ママさんたちも「神戸っ子」の創刊一周年を祝って、美しい花をそえてくださいましたし、司馬先生は奥さんとごいっしょに大阪から車でかけつけてくださったり、「九九％出席」のご返事はいただいてたものの残る一％の欠席が濃厚では…と案じてた阪本知事が、ヒョッこり姿を見せてくださり激励くださるなど、とても幸せで盛大な〝神戸っ子の集い〟でした。

・〝絆をぬいで、楽しく遊んでいただくパーティ〟というので、生

ビールを飲みながら、中西先生の「乾杯の歌」でスタート。百崎氏のたくみな手品の手さばきにだまされ（?）たり、古林先生の美声と名句に聞きほれたり、佐々木侃司氏の即席マンガに拍手が湧くなど会場は和気アイアイ。このほか木下繁、白川渥、阪本勝、司馬遼太郎の四氏の愛情のこもった、またユーモアあふれる一分間スピーチもありました。そしてほどよくアルコールのまわった頃に、この集いの呼び物（?）〝ファッション・ショー〟——当日のホステス役をしてくださった美しいお嬢さん十人をモデルに、各テーブルで新聞紙、ツマ揚子、色テープを使って〝着つけ〟を競う遊びです。持ち時間は十分間、ワルツの調べに合わせて皆さん一生懸命です。楽しそうな顔、テレくさそうな顔真剣そのものといった顔……。テーブルの上の飾り花は、無残にも折られていきます。意外と殿方の手つきのあざやかなのに感心させられているうちに時間切れ。ステージに並んだ十人のモデル嬢のスタイルやデザインにもう爆笑と拍手の嵐です。藤本義一、鴨居玲、中西勝、佐々木侃司氏四人がインスタント批評を買って出てくださいましたが十人十色で甲乙なし、光る源氏やオランダ娘、みなと型などずい分凝ったデザインや、なんとハート・ブレイク型まで飛び出したのには驚ろきでした。でもみなさん楽しそうで何よりです。

珍らしい顔合せ・阪本知事（左）と司馬遼太郎氏（右）

・フィナーレは、うんとロマンティックな演出で、全員ローソクを手に「荒城の月」や「花」「螢の光」をコーラス、そして午後八時すぎ、来年もまた楽しく集うことを願って散会しました。

・この創刊一周年記念〝神戸っ子の集い〟のプランナーは、兵庫県青少年野外活動協会事業部長の三浦保氏で、当日の司会役を受け持っていただくなど大へんお世話になりました。また当日、お仕事の都合で欠席されました青木重雄、榎並正一、小曽根真造、岡部伊都子、嘉納正治、小磯良平、小林芳夫、滝川勝二、竹中郁、松井高男宮地襄二各氏（以上五十音順）の発起人の方たちにも誌上をかりまして、〝神戸っ子の集い〟が盛大に終えることができましたことをご報告するとともに、厚くお礼申しあげます。

（編集室）

編集後記

・小説はじめ、映画、TVと世はまさに〝推理ブーム〟です。その割りに〝探偵小説〟の元祖の火つけ役（?）ともいう人物、西田政治氏が神戸にいらっしゃることは知られていません。どうして知られてないのか—これこそ不可思議なナゾですね。早川氏はヒチコックマガジンに毎月飜訳の短編を書いてられます。

・久しぶりで表紙は人物画です。小寺厳神戸国際会館常務取締役が持ってらっしゃる絵を拝借いたしました。

（I）

月刊「神戸っ子」案内

☆ 月刊「神戸っ子」を毎月御購読下さいます方、神戸を離れているお友達にプレゼントなさりたい方は編集室宛にお申込下さい。6ケ月分・500円（送料共）

☆ 誌上紹介の各神戸の銘店にはお客様へのサービス品として「神戸っ子」がおかれています。

☆「神戸っ子」をお求めのさいは左記の本屋さんでどうぞ。

文洋堂・国際会館1階
海文堂・元町3丁目
漢口堂・京町筋角
日東館・大丸前
流泉書房・センター街

神戸と女性

星空ひかるさんは、宝塚花組の二枚目スターです。ブルー系統と白のよく似合う彼女の〝清潔な美しさ〟はファンの間でも定評があり、春日野八千代に次ぐ宝塚の正統派男役として大へんな人気です。

最近は歌に芝居にと一段とうま味が加わり、舞台がひとまわり大きく見えます。

神戸生まれ、夢野台高校出身。

撮影　杉尾友士郎

月刊「神戸っ子」・発行／S37，4，15・編集／五十嵐恭子・発行／小泉康夫
編集室／神戸市葺合区御幸通8丁目9ノ1　国際会館1階・TEL㉒7037・頒価70円

発行に色々とお世話いただいた方々

山口泰弘　若杉了慧　森崎辰三　百崎嘉二郎　宮地囊　松井高　古川虎男　福富芳夫　中西美勝　直木太郎　永井達七郎　田中健一郎　田村孝之介　滝川勝二郎　塩崎二郎　白川湿　阪本勝　古林喜桑　後藤去二　久保甚太郎　小林芳夫　小磯良平　木下繁　嘉納正泊　川西奏　金井元彦　大淵ツトム　小曽根真造　岡部伊都子　岡崎真一　牛尾吉朗　槙並正一　石野成明　青木重雄

●本誌広告により広告主へ直接御注文やお問合せの際は「神戸っ子」広告による旨お書き添え下さい。
●広告主の住所不明な時は「神戸っ子」編集室にお問合せ下さい。お取次いたします。
●「神戸っ子」に広告掲載御希望の向きは「神戸っ子」営業部宛御照会下さい。　「神戸っ子」編集室

CARONIA
コンテッサ
Hino コンテッサ
神戸日野自動車
TEL④5771～5

月刊「神戸っ子」
発行所／神戸市葺合区御幸通八丁目九ノ一　神戸国際会館一階　TEL(22)七〇三七
昭和三十七年四月十五日発行　毎月一回
編集／五十嵐恭子　発行／小泉康夫
頒価七〇円（送料20円）

新発売！
ナショナル
テープレコーダ

※お近くのアフター・サービスの行届いたナショナル連盟店でお求め下さい。

独自の新設計　サウンドモニター方式

録音する声や音の大きさを直接モニターしながら録音できる夢の新方式《拡声機》の役目もします。　プレヤーをつなぐとＨｉＦｉ電蓄としてお楽しみいただけます。

プッシュボタン式
標準型 ＨｉＦｉテープレコーダＲＱ７０３
現金正価・３１，８００円／定　価・３３，４００円